

封入体肝炎

病性鑑定課

本病はグループ トリアデノウイルスの感染により引き起こされるが、しばしば、伝染性ファブリキウス嚢病や鶏貧血ウイルス感染が誘発要因として関与する。本病は3～7週齢の肉用鶏に好発し、死亡鶏の増加が一峰性に5日間程度持続し、10%前後の鶏が死亡する。剖検により病鶏の肝臓は腫大、褪色、脆弱化を示し、点状ないし斑状出血を伴う。トリアデノウイルスが人に感染しないことから、本病の公衆衛生上の問題はない。

2006年11月、県内の肉用鶏農場で3週齢の9,000羽中約500羽が急性経過で死亡した。検索した病鶏の肝臓および脾臓に好塩基性核内封入体を伴う多発巣状壊死および線維素化膿性漿膜炎が観察された。アデノウイルス遺伝子が肝臓から検出され、大腸菌が化膿性病巣から分離された。得られた成績から大腸菌感染を誘発要因とする本病と診断された。大腸菌症対策を行い、本病の終息を得た。

(岩手の畜産 2007年2月号に寄稿)